河西走廊における地名の変遷(3－2)

――張掖と酒泉を中心として――

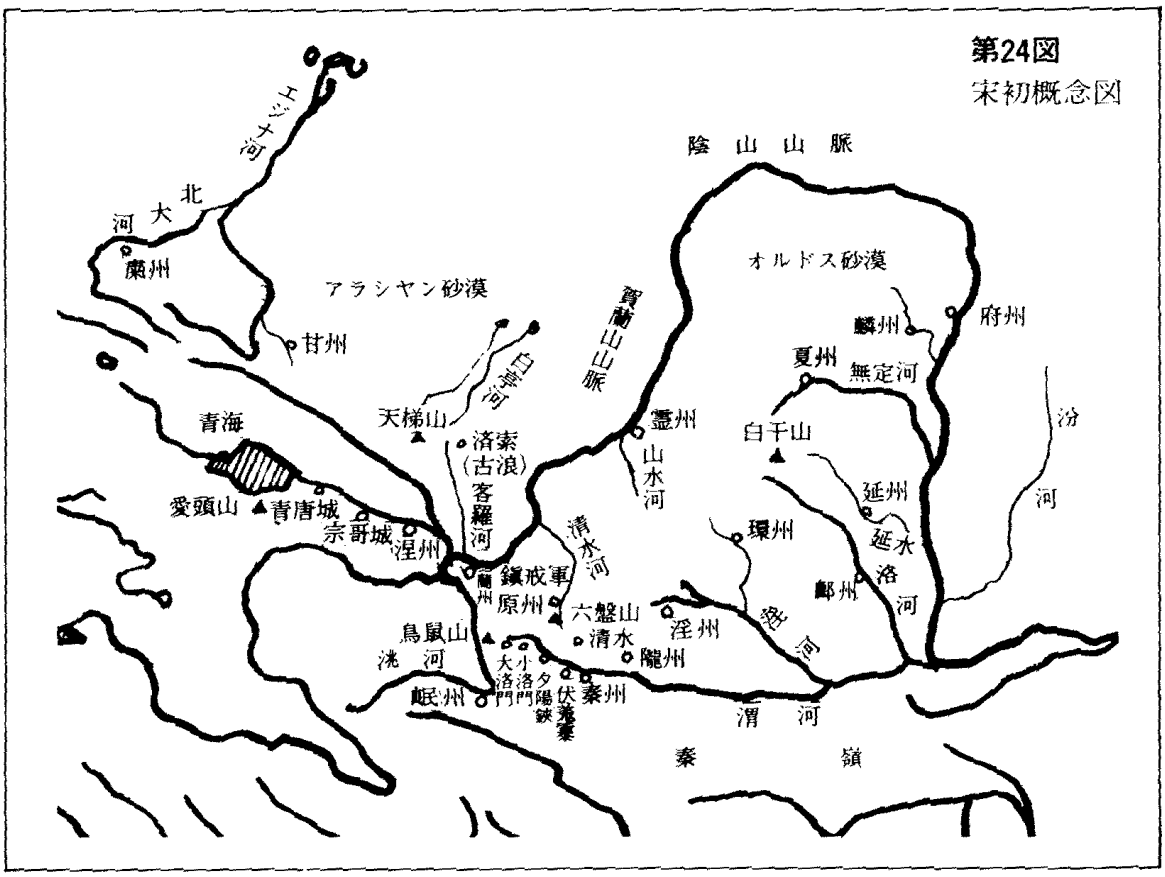
藤　島　範　孝

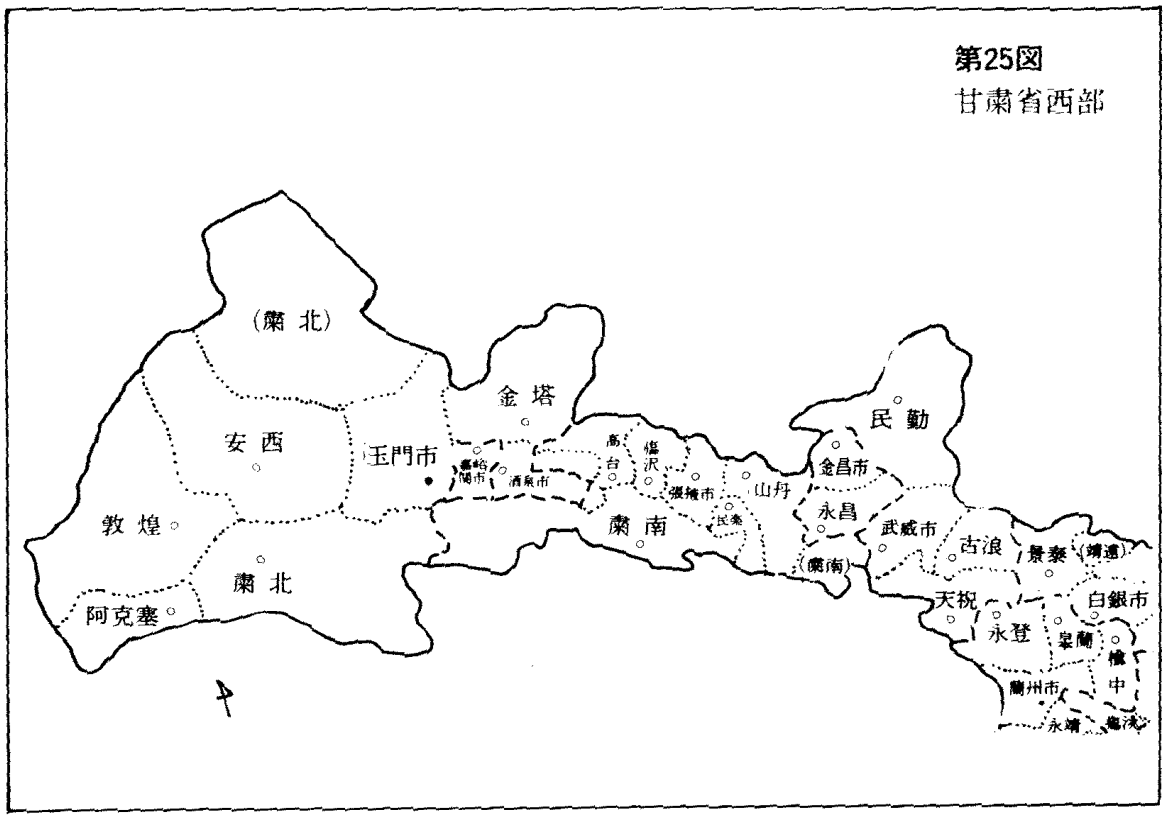
5

高台 (Gaotai)[①]県は弱水の中下流にある集落である。張掖の西北約75kmに在り，漢代には表是県が設けられている。東漢代には表氏と改称され，晋代も同じ表氏とされている。後には前涼の地となって建康郡としている。北魏には廃止されている。唐は初め再び建康廊を置き，のちに廃止している。宋代は西夏に没し，元代に入って甘州路に所属している。（第24図参照）明の初め馮勝が河西地方を平定し，高台站を設置している。同県の西方に台子寺があって，高台子とも呼称されていたことによるといわれる。更に高台治所を設け陝西省陝西司に属させたりしている。清は初め県を設置し，甘粛省粛州の行政範囲に入れている。1914年甘粛省安粛道へ属することとしている。今日では張掖市の地区へ編入させられている。(第25図参照)

高台県の北部は河西走廊北大山の合黎山系で、北部の砂漠地帯と遮えぎられている。合黎山（Helishan）は南に連らなる竜首山系（首峰東大山3616）と併せて，中央の緑地を維持している。合黎山の平均高度は1500mほどである。首峰は高台県の北にあって，海抜2081mあり，南の祁連山系と対立している。

台黎山と竜首山が連続して作る走廊北大山の北は巴丹吉林砂漠（Badain jaran shamo）である。行政区画でいうと阿拉善右旗[②](Alashanyouqi）と額済納旗 (Ejinqi)[③]東部一帯が含まれている。西部の古魯納湖，北部の拐子湖までと，東部は雅布賴山，南部は走廊北大山で限られている。砂漠の総


第24図
宋初概念図
陰山山脈
オルドス砂漠
アラシヤン砂漠
大河
北河
蘭州
甘州
賀蘭山脈
麟州
府州
夏州
無定河
白河
天梯山
靈州
白干山
汾河
青海
濟索
(古浪)
山水河
延州
愛頭山
青唐城
宗哥城
涅州
客羅河
清水河
環州
延水
鎮戒軍
原州
鄜州
洛河
六盤山
涇州
清水
隴州
鳥鼠山
洮河
大洛門
小洛門
夕陽鉄
伏羲寨
秦州
岷州
渭河
秦嶺

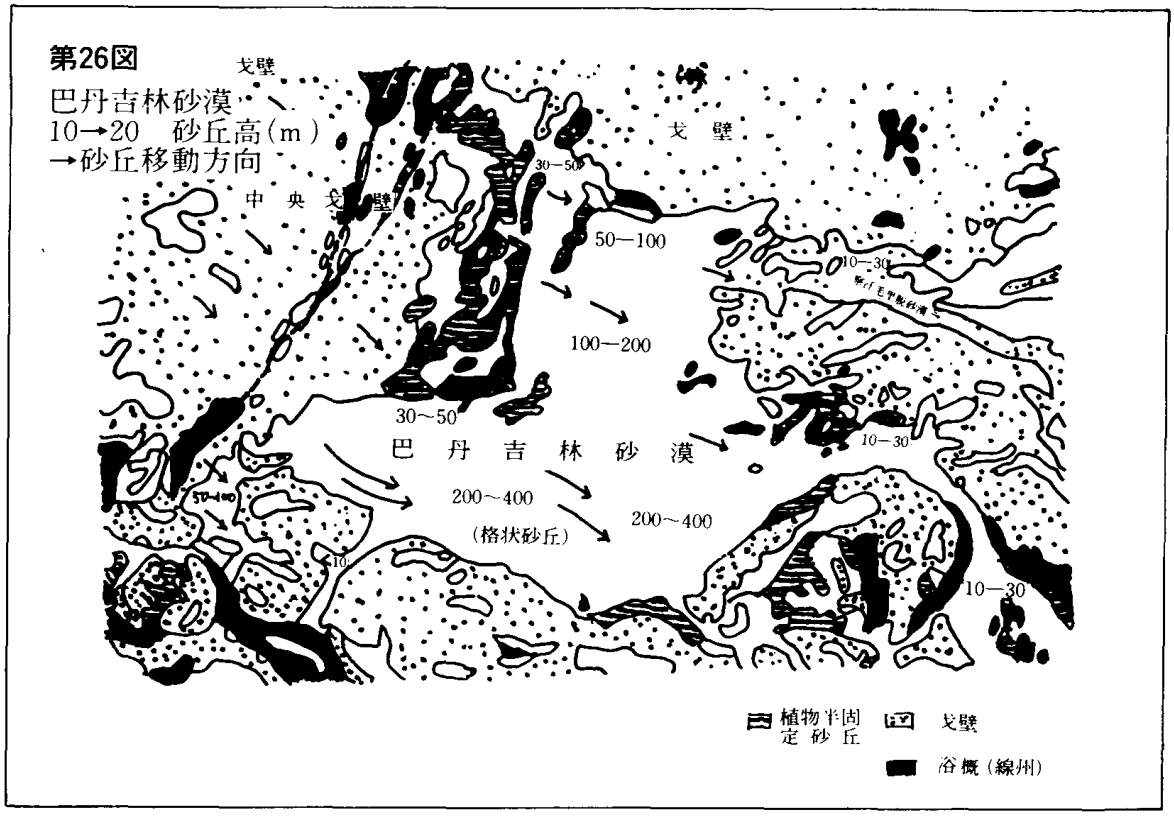

第25図
甘粛省西部
(蘭北)
金塔
民勤
安西
玉門市
嘉峪関市
酒泉市
高台
臨沢
張掖市
民乗
山丹
金昌市
永昌
(蘭南)
武威市
敦煌
蘭南
古浪
景泰
靖遠
蘭北
阿克塞
天祝
永登
皋蘭
白銀市
榆中
蘭州市
永靖
臨洮

面積4万㎢，中央は複合型の砂丘で高さ200～300m，最高400mのものもある。移動速度は遅く，砂丘間に凹地と塩湖が散在している。海韮菜や踏淖などが生育していて，一部牧場として利用されたりしている。

一般に阿拉善砂漠と言われるのは，賀蘭山の西部から河西走廊にかけての砂漠の総称である。小戈壁④の東側に位置している。古い変成岩の侵食された地形で，小山，丘陵，砂礫の盆地などが連らなっている。地域によって巴丹吉林，騰格里，烏蘭布和などの砂漠に区分して呼称している。亦，阿拉善（Alxagayuan）高原と呼ぶこともあった。内蒙古自治区の巴彦淖爾盟⑤があったところである。西は馬髪山，東は賀蘭山，南は合黎山と竜首山の走廊北山，北は内蒙古高原の西部，平均高度900mの高原で，最高は1300mに達する流動砂丘が主体で所謂戈壁である。

阿拉善とは賀蘭山（Helan shan）を訛って呼んだものである。阿拉善には旗があって阿拉善旗といっていた。内蒙古自治区の巴彦淖爾盟の南に位置していた。漢から唐に至るまでは武威或は霊武の地として扱われていたのである。西夏の時代は右廂朝順軍白馬強鎮軍に属していた。清代に入って康熙25年（1686）阿拉善旗に編入し，1950年に阿拉善自治旗が成立して，寧夏省に属している。1954年には阿拉善旗として甘粛省に編入されている。1956年には額済納旗と合併して巴彦淖爾盟として内蒙古自治区に編入している。1961年阿拉善左旗と右旗を区分して，1969年阿拉善左旗は寧夏省の寧夏回族自治区へ，右旗は甘粛省の武威地区へ編入し，1979年再び内蒙古自治区へ戻している。額肯呼都に旗政府⑥を置いてある。（第25図参照）

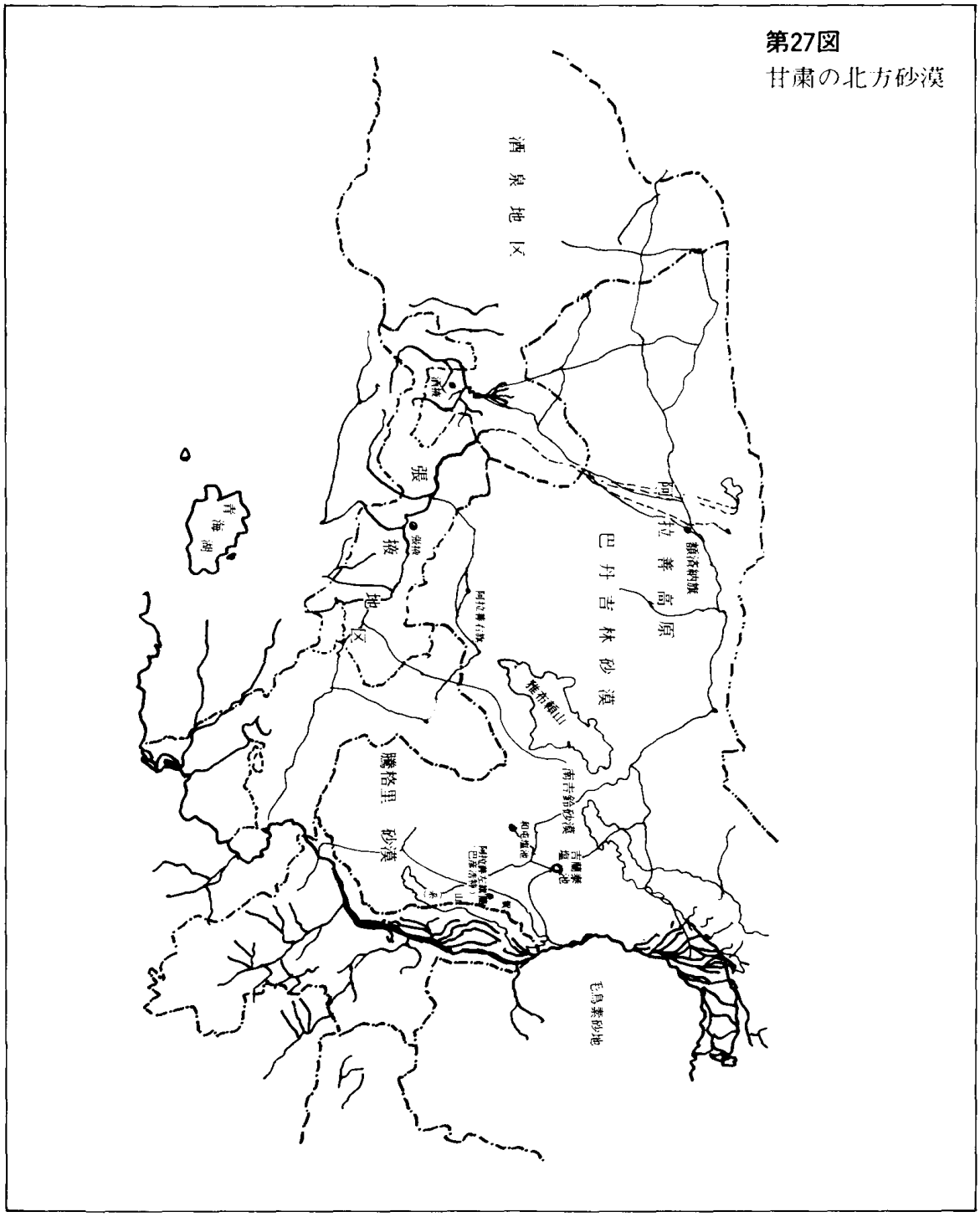
阿拉善右旗（Alashanyouqi）は旧名を巴音浩特といい，別称を定遠営といっていた。阿拉善族の文化の中心で，毛皮の集散地としても広く知られている。寧夏回族自治区と甘粛省の境界で，阿拉善砂漠の部分をなす騰格里砂漠（Tengger shamo）は阿拉善左旗の南西に位置している。面積は3万㎢で，標高は1200～1400mの高原で半月砂丘が多い。砂丘は



常に南東に移動しつつある。更に西には烏蘭布和砂漠 (Ulanbusshamo) がある。

烏蘭布和砂漠は巴彦淖爾の磴口県⑦と杭錦旗⑧に広がっている。面積にして１万4000㎢である。北は狼山，南は賀蘭山の北麓，東は黄河，西は吉蘭泰塩池までで，東西の幅110km，南北の長さ150kmに及んでいる。北部は固定，半固定の砂丘群から成立しており，南部は流動砂丘で南東へ移動している。

扨て，弱水の下流の額済納旗 (Ejinqi) は河西の額魯特で蒙古族の一族で，古くは土爾扈特部といっていた。元代の亦集乃路で額済納旗は亦集乃の訛ったものである。旗政府は達来湖波（達蘭庫布）に置いてある。漢代には張掖郡に属し，隋から唐までは，甘州と粛州に編入され，西夏の時は黒水鎮燕軍に属し，元代に入って亦集乃路に区画されている。土爾扈特部は遊牧民で，古くは阿勒泰一帯の草原地を拠点にしていたのであるが，康熙年間に移動を開始して，青海省の祁連山系の北麓から，甘



第27図
甘粛の北方砂漠

粛省の敦煌，安西方面へ移動し，雍正年間には弱水の下流，居延海方面へ進出し定着はじめたのである。1929年に額済納土爾扈特旗を建てている。当時，弱水の流域と居延海の周縁は広大なる草原で良好なる牧地であったことに據るものである。

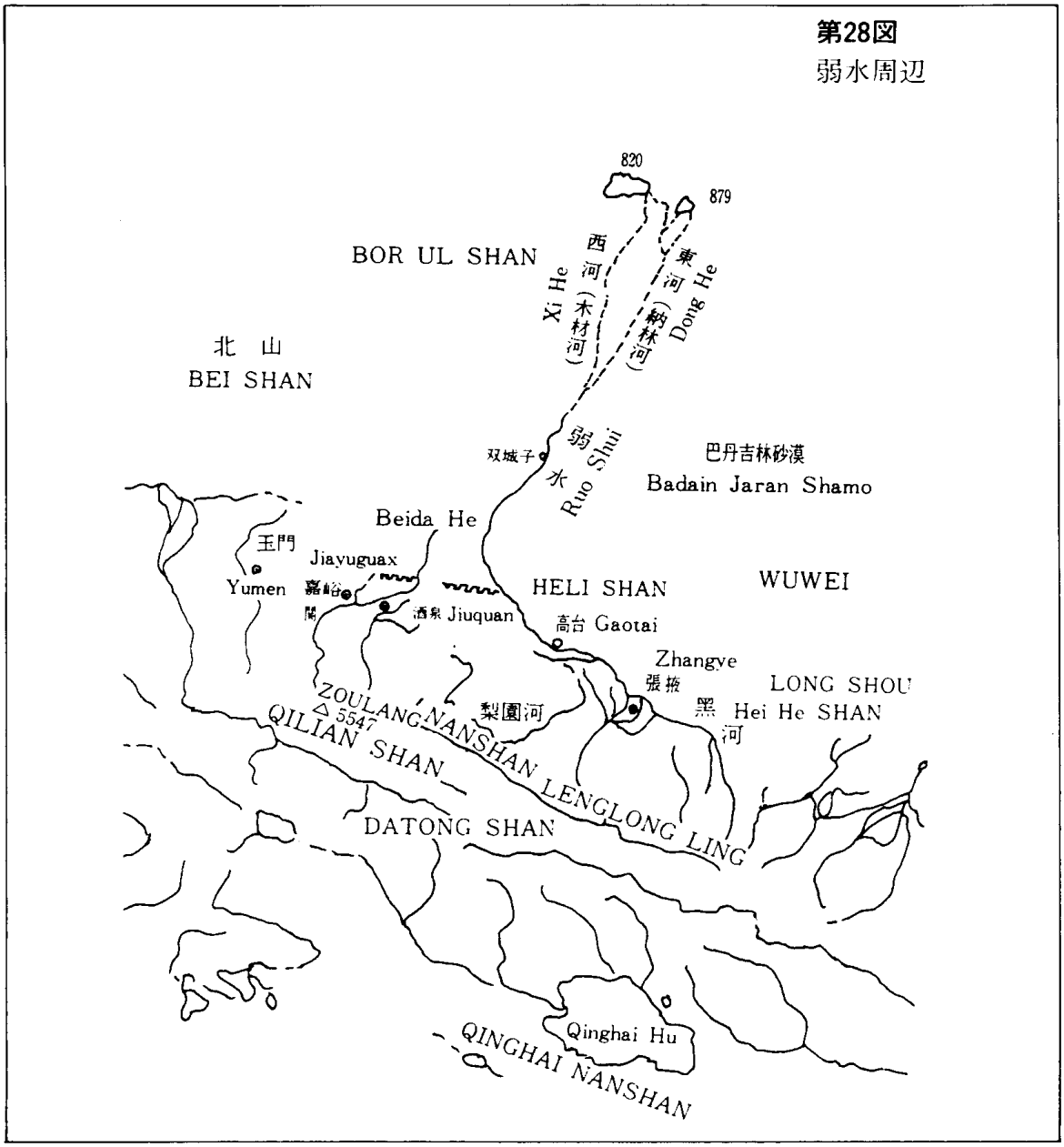
居延海は額済納旗の北方の塩湖で，かつて弱水の一部木材河を経て嗄順諾爾（居延海）へ注ぎ込まれていた。併し，上流の潅漑化によって表流水は涸れ，強力なる集落の形成や牧地の拡大も一様でなくなり，管轄の行政も転々といているのである。

併し乍ら，古くから張掖や酒泉の辺外の地として重要視されてきている。1928年に寧夏省に属し，1956年甘粛省に属して，1956再び一時内蒙古自治区へ編入され，1969年甘粛省へ戻り，1979年内蒙古自治区の管轄となっている。

張掖や酒泉からみると弱水によってつながっていたのであるが，弱水そのものが涸れると，単に辺疆の砂漠の中の小集落と化してしまったのである。（第27図参照）

弱水は祁連山系の走廊南山の南斜面から源を発し，長い縦谷を一路東南へ下り流れ，青海省祁連県八宝鎮で流路を北西へ転換して，走廊南山と冷竜嶺山系の間の横谷を作り流れ，更に北東へ溯上し張掖へ出る。（張掖河・導水・甘州河・黒河），この間黒河と呼称されて，北西へ流路を変えて，臨沢県，高台県を経て万里の長城を横断し，金塔県へ出て流れを北東に向きを変える。この時，増水期は特に祁来山系より酒泉県を経て流下する北大河（白河・白水）と合流して納林河と木材河に岐れて巴丹吉林砂漠の西側を流れて，額済納旗へ入いり，その北方で嗄順諾爾と索果諾爾の両湖へ注いでいる。巴丹吉林砂漠より北は全くの涸れ川で，融雪期に一時的に地表を流れる水があったとされている。嗄順諾爾と索果諾爾も，もとは一つの居延海から分かれたものだけに汀線は常に移動している。その意味では，さまよえる湖の一つでもある。この北の双城子が中国の人工衛星最初の発射基地となっている。

弱水の如き乾燥地域の一時的な河川といえど，普通の河川のように侵食や堆積の作用は行われている。併し，常時流下する河川と異なるのは，流下する基準面が異なることである。海への傾斜がないので流下斜面への調

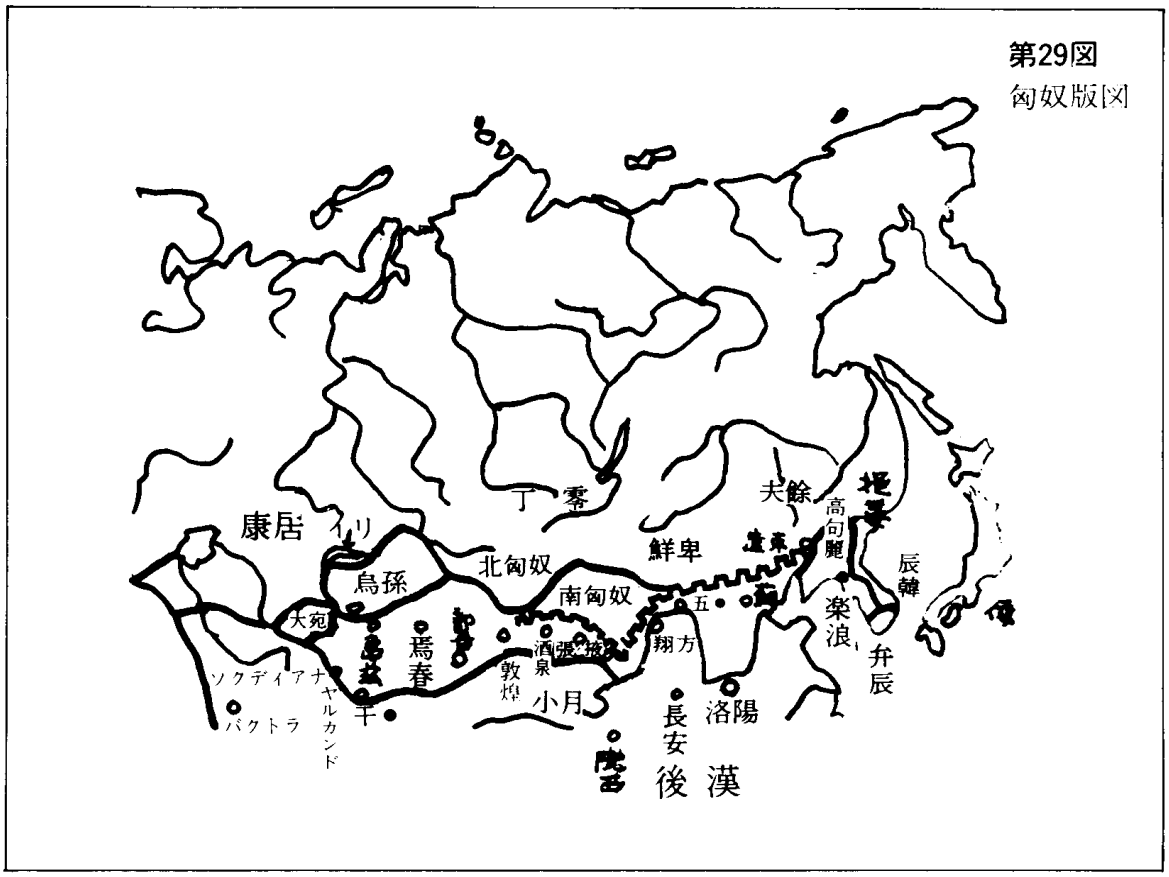


第28図
弱水周辺

節がとれていないことである。河口の扇状にも規模の限度があり多数の人口を収容できない。扇状地を連らねて集落ができるものの，水量が豊富でないことから農耕地の拡大もままならぬのである。特に金塔県から北の弱水は人口の収容力は極端に少くなる。天倉から南は潅漑能力も比較的多く，農耕地の余裕も多少ある状態である。（第28図参照）

6

張掖⑨は流沙の地と呼称されたこともあるが，禹貢の言う導水（張掖河・



甘州河）と弱水（黒河・黒水）が，合黎に至り，その余水は匈奴の地へ入ることを意味していたのである。（第29図参照）武威からは235km西北の地にある。

漢の武帝⑩は張掖郡を設け治所を置き觻得県としている。元鼎６年（BC 111）武威と酒泉を分けて，張掖を武威に属させて涼州張掖郡と呼称している。三国魏も同じ扱いとしている。晋代へ入って，涼州張掖郡を定めて治所は永年へ設置している。北涼は張掖を拠点として建国し，北魏になって甘州を用いている。隋は張掖県と改めて薩州張掖郡としている。治所は張掖に置いている。唐代は隴右道甘州に属させる。のち吐蕃に没している。宋代は陝西路として，のち秦鳳路と改め更に永興軍路とするも一部は既に西夏の占拠下にあった。元代は甘州路と決め，明代に入って甘州衛と改めている。清代に入って甘州府とし，張掖に府所を設けている。1913年府を廃止して県とし，1914年甘粛省甘涼道とし，1961年復

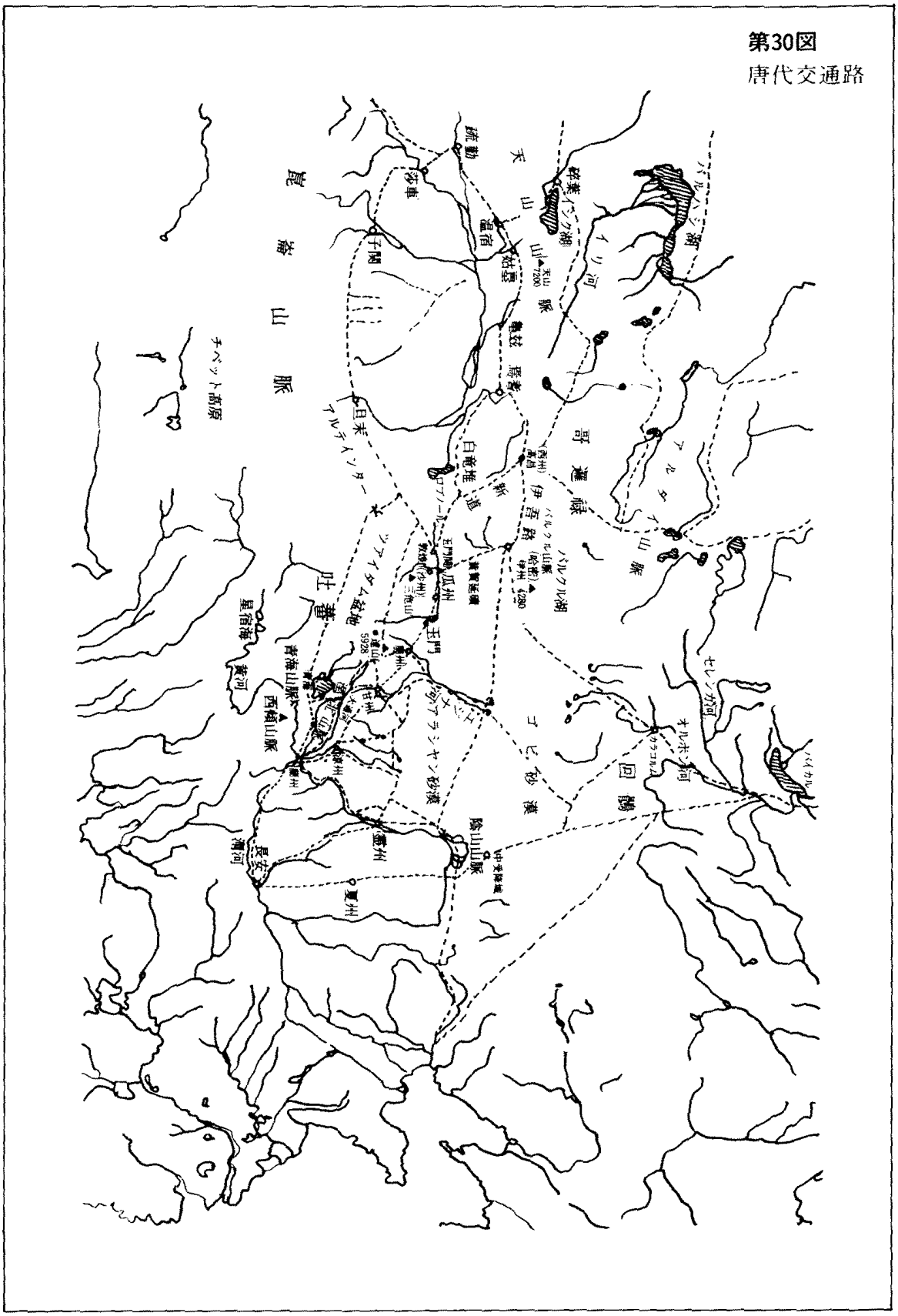
び県と改め，1985年張掖市となり，金の張掖，寨上の江南とまでいわれるようになっている。

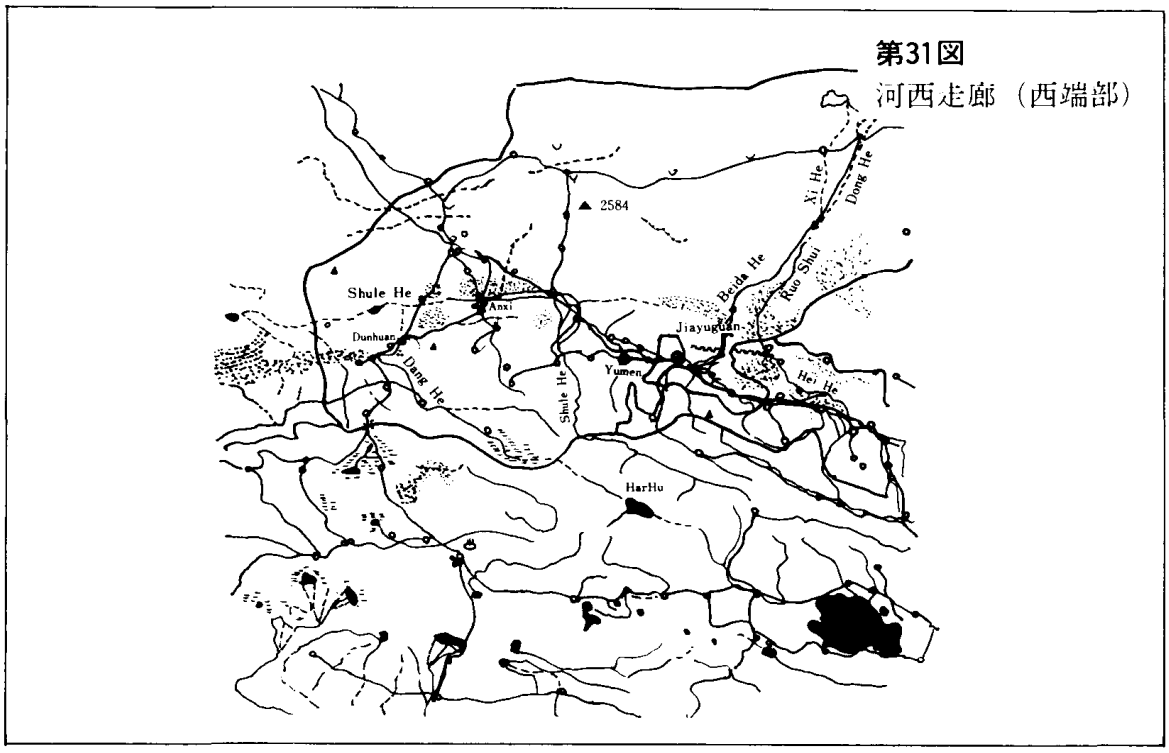
張掖は，弱水の上流に当たる張掖河とその支流の山丹河の合流地点に開けた渡津集落である。張掖の草原の規模は走廊第一と言われるほど緑地に恵まれている。関中から進出した漢族にとって，武威（涼州）について第二の城塞が築かれた程の北進の重点な地点であったといわれる。「東方見聞録」にも張掖の景観について記録されていることは，よく知られている。張掖河の氾濫によって没したといわれる漢代の觻得城址もあって当時の貴重な資料となっている。張掖の最も大切な都市機能は走廊の宿場街の役割であった。

河北省の張家口[11](Zhangjiakou)，帰化城を経て，北大山，若知林井を通る内蒙古砂漠路といわれ張掖から出発している。俗に駱駝路といわれ，この間駱駝で約50～60日の旅程で横断できるといわれている。寧夏回族自治区（Ningxiahuizuzizhiqu）へ通ずる駱駝路もあって，この方の旅程は約15～17日といわれている。駱駝の他に一頭及至二頭曳きの牛車を後には用いている。張掖を基点とする交通路は単に河西走廊のみではなく，関中への近道と北方民族の流入交易という多様な機能をもっていたと考えられる。これらの基礎は漢代からのものであるが，唐代に最もよく発達をしている。（第30図参照）

張掖の中心街は磚壁によって囲まれており，主要なる公所は全て城内に包合されている。古くから物価の低廉なる地として知られていた。このことは無論集散機能が発達した都市ともいえる。甘粛省南部の地方と河套地域と砂漠路交易の発達によるものである。シルクロードの発達した当時はともかく，後代に至っては河西走廊の各都市は各々砂漠放射路を通じて交易を行い，より駱駝路が重要視されたものとみるべきである。横断道路の発達が河西諸都市の機能を支えてきたのである。（第31図参照）

張掖も駱駝路を通して天津港との繋がりをもち，その商圏に属したこ


第30図
唐代交通路
バイカル湖
セレンガ河
オルホン河
カラコルム
回鶻
ゴビ砂漠
ハミ
バルクル湖
バルクル山脈
伊吾路
哥邏禄
アルタイ山脈
イリ河
碎葉
イシク湖
天山山脈
焉耆
亀茲
疏勒
砂車
于闐
尾蔡山脈
チベット高原
日末
アルティンター
白竜堆道
ロプノール
玉門関
瓜州
敦煌
ジャイダム盆地
吐蕃
星宿海
黄河
青海山脈
西傾山脈
ハルハ
アラシャン砂漠
陰山山脈
長安
渭河
夏州



第31図
河西走廊（西端部）

ともあって，渤海の背後地を形成したこともある。ややもすると河西走廊を南北交易路として，その地形から中心に考えられ易いが，張掖からの北の集落は各れも砂漠の中に単独で成立した泉池集落でそれが交易集市の機能をもっていたと思ってよいであろう。

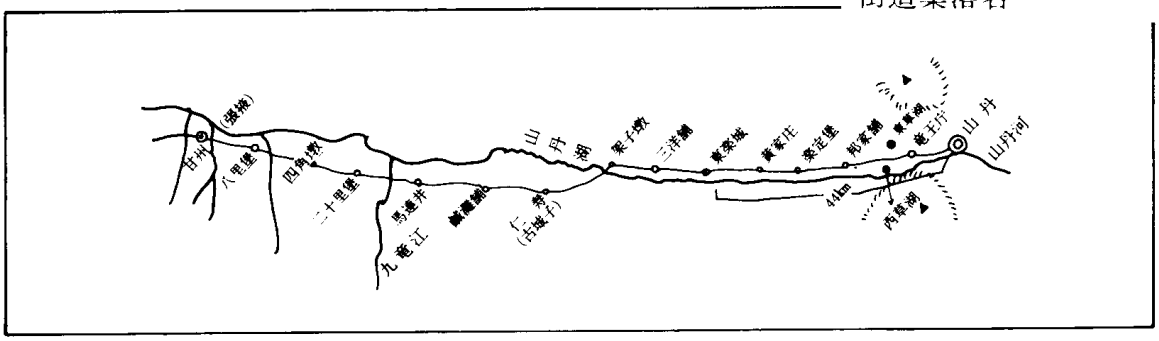
張掖に集散された物資は，河西走廊を伝わって南北へ分散していったのであるが，この本街道の集落については見逃がされ易いので，その宿場街を拾ってみることにする。張掖から南へは，八里堡，[12] 四角墩，[13] 二十里堡，馬連井，鹹灘舗，[14] 仁寿（古城子），架子墩，三羊舗，東楽（城），黄家圧，[15] 楽定堡，邦家舗，竜王庁，山丹に至るのである。各れも山丹河に添っている。地名から城塞か集落か泉池が主であったと知れる。（第32—1.32—2図参照）

張掖から高台までの街道集落は五里墩，天河堡（夾河塘），二十里堡（崖子堡），三十里堡（繞煙堡），沙井庄，沙河堡，九眼泉，小屯子，古寨堡，撫彝，三工堡，双泉舗，渠口堡，十里堡，高台などがある。各れも集落と関連した地名である。[16]（第33—1.33—2図参照）

高台から酒泉の境界までは，八里堡，鎮四堡，宣化堡，安定堡，大寧

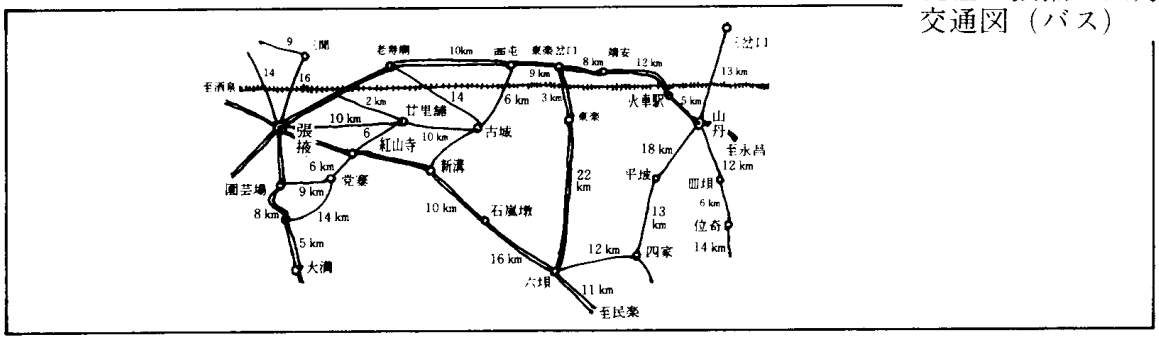
第32―１図

河西走廊(張掖～山丹)
街道集落名



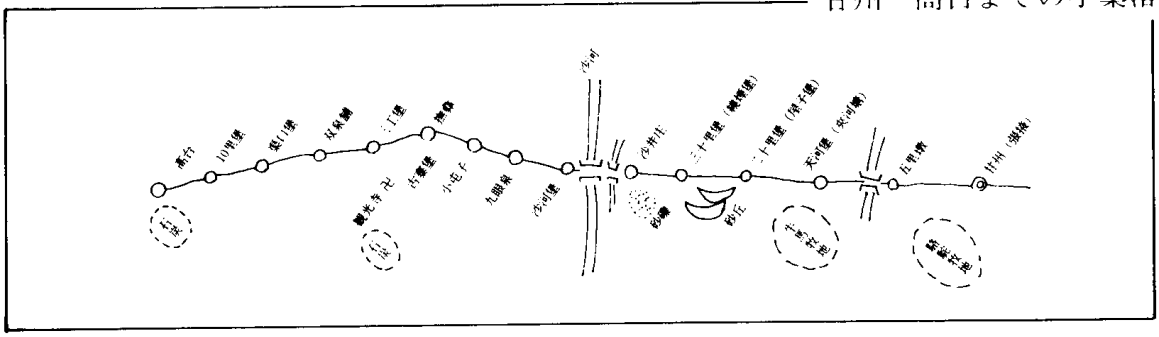
第32―２図

現在の張掖―山丹
交通図（バス）



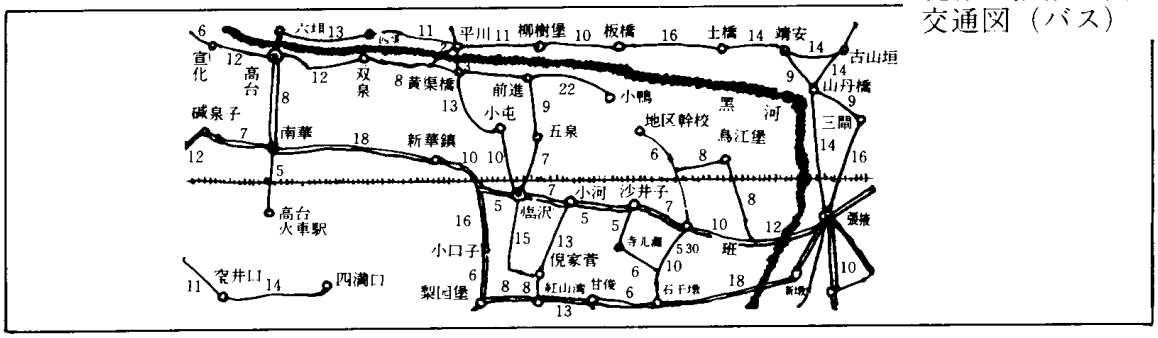
第33―１図

甘州～高台までの小集落

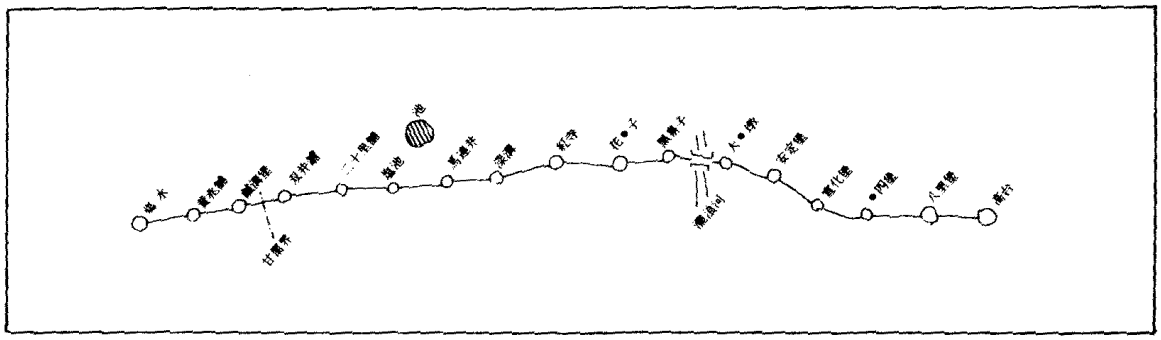


第33―２図

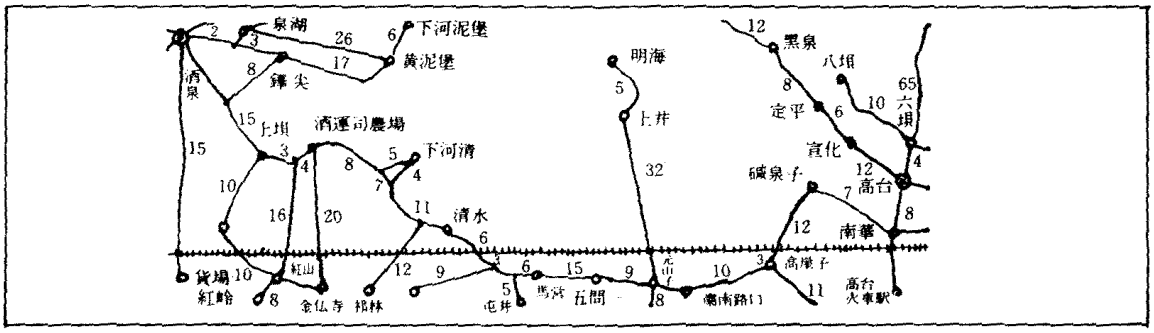
現在の張掖―高台
交通図（バス）



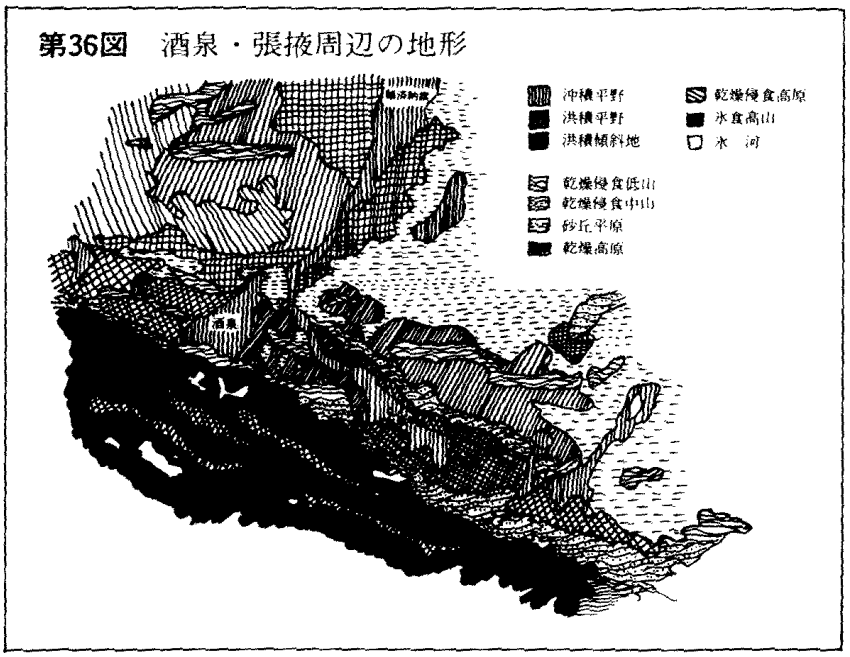
第34－１図
高台～臨水の間の小集落



第34－２図
現在の高台－臨水間交通（バス）



第36図　酒泉・張掖周辺の地形



墩，黒泉子，花墻子，紅寺，深溝，馬連井，塩地，二十里舗，双井舗，鹹溝堡，黄兆舗，臨水と連らなっている。（第34—1.34—2図参照）

今日では鉄道があるので，この駅名で山丹から北上すると，山丹，北弯，[17] 大橋寨，東楽，西屯，太平堡，張掖となる。張掖から烏江堡，平原堡，沙井子，臨沢，新華庄，明水河，高台となる。高台から梧桐泉，駱駝城，許三湾，[18] 元山子，屯井，清水，来楽灘，[19] 上河清，金仏寺，紅山堡，東洞，酒泉となっている。これが蘭新鉄道の山丹から酒泉までの行程である。

前漢の霍去病は西征して匈奴を追い焉支山（燕支山）を超え，隋の煬帝は扁都口から降りて吐谷渾軍を追い河西走廊に入いり，西域からの商人や君主との接見を張掖で行い，西域の声威を示したいわれるように，張掖は前線基地であると同時に中央アジアから玄関口の機能を果していたのである。かつ煬帝は裴矩を張掖に常駐させて西域諸国との通商業務を営掌させているのを見ても商業都市としての張掖のあり方が想定できる。

裴矩[20]は西域四十四国の国内状況をまとめて「西域図記」にしたが，煬帝は，これに従って西域政策をたてたと言われるように，張掖は経済，文化などの情報を蒐集しやすい位置にあったとみてよい。南北朝のあと隋などの内陸統一には強力な統轄力をもっていたものの，暫時河西を放棄せねばならぬ事情が発生したとはいえ，河西走廊の中心的機能を失わずに保っている。

これは，張掖はひとつに駱駝路の拠点でもあったため，河西走廊という直接の南北道を失っても，東西道が常に生きていたからでもある。その意味で各種道路の集中的機能を持っていたのである。放射状にはりめぐらされた交易道を十分活用し乍ら都市形態を保持することができたのである。しばしば，張掖を中心とする小国家が成立するのも，陸の中の中継貿易港的な性格を具備していることによると思われるのである。

張掖の西北に昭武という小集落がある。唐代で言う「昭武九姓」で，

紀元前に匈奴によって葱嶺の西方へ追われた月氏一族の末裔の人々によって構成される小集落であるといわれている。

現在は臨沢県[21]鴨暖に属している。「鴨暖」の地名は宋代の蘇軾（東坡）の「春江水暖かにして鴨先ず知る（恵崇・春江晩景）」から借りたものといわれるが，蘇軾の詩を借りねばならなかった理由は不明である。亦，甘府志を見ると，昭武古橋は板橋の東南にありとあるので，最近になって移住して来たことが想定される。このことは黒水河（黒河）の対岸から入植したことをしめしている。洪水なのか他の事情なのか詳らかではない。こうした意味でも張掖は異民族にとっても集積魅力が働くような地であった気がするのである。張掖は先ず自然的諸条件の具備で注目され，やがて，中国内地の前線基地となり，西域からの玄関口となり，交易の拠点となっていった都市であると言える。

7

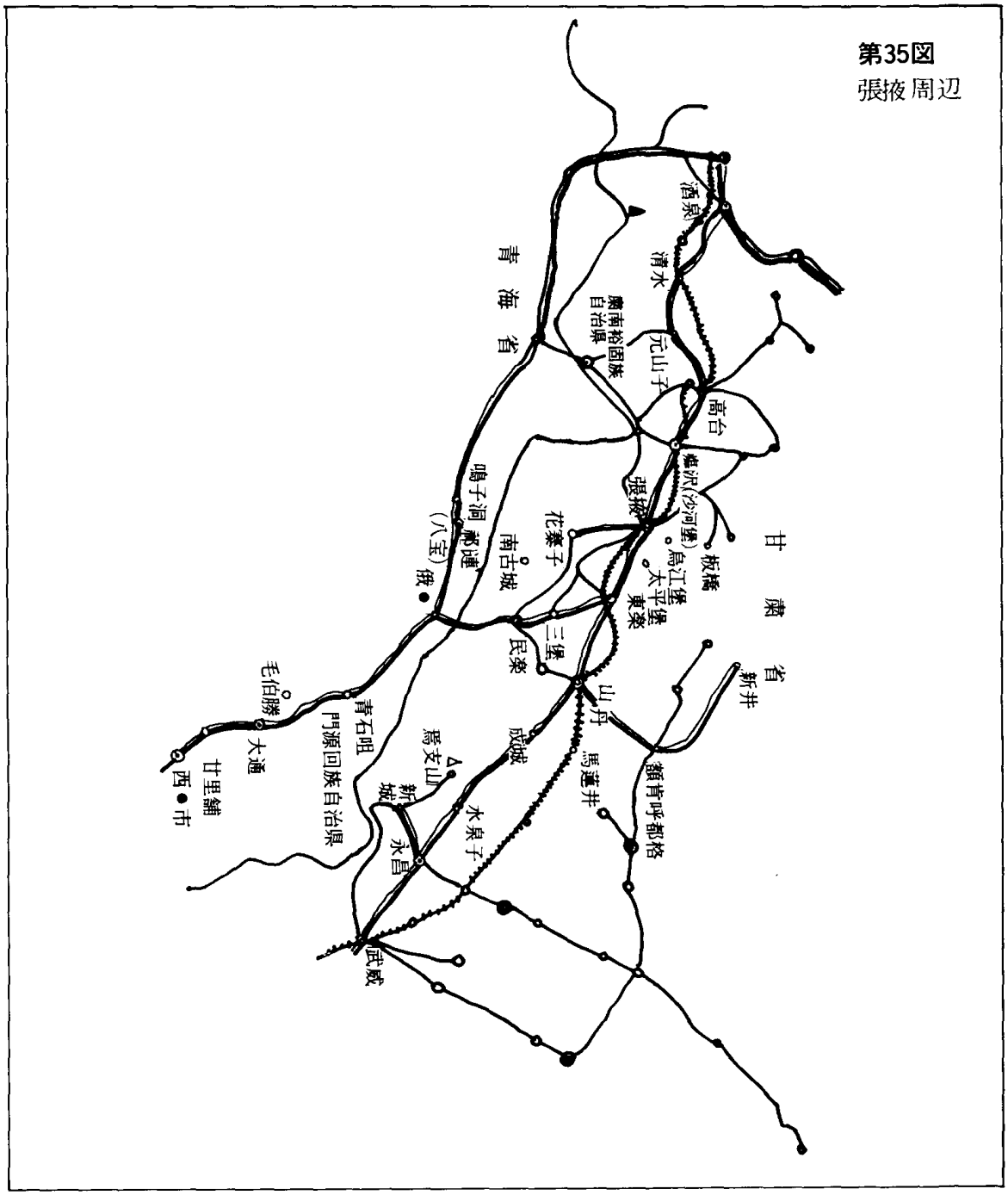
酒泉[22](Jiuquan）は河西走廊のほぼ中央，張掖の北西，弱水の上流で，その支流北大河（白河，臨水）の流域に在る集落である。（現在は弱水と白大河との表流水は結合していない。季節により弱水の支流となる。）古くは，月氏族の拠点であり匈奴の中心舞台の一つでもあった。北に馬鬃山（北山．2583m）を望み，南に托来南山（5148m）が冠雪して連らなっている。（第36図参照）

冬が長く夏が短い大陸性気候を呈す地方である。漢の武帝の西征時に酒泉郡へ治所を設置して後正史の中へ繰込まれている。酒泉の語源には幾つかの説がある。古くから中国内地にも各地に地名として酒泉があったことから定説を定めるのは困難でもある。

①「応劭・地理風俗記」には，「酒泉郡の水は酒の如し，酒泉の名がある。」

②「顔師古・漢書注」には，「俗伝では城下に金泉があり，泉味は酒の如し」とある。

③「漢書注」には又，「崔家泉が城の東北一里にあり，崔家荘側にあって



第35図
張掖周辺

清泉を湧き出す，よく澄んでいて北流する。人はよく酒泉と呼んで間違えている」ともある。

④「路家海子」には「城の西25歩にあって，広く湧き出る。水色がやや黄ばんでいるところから，人呼んで酒泉という」ともある。

⑤「西陲今略」によると，「城の東北一里に泉があり，色は黄，味は酒に

似る。よって酒泉と呼称している」ともある。

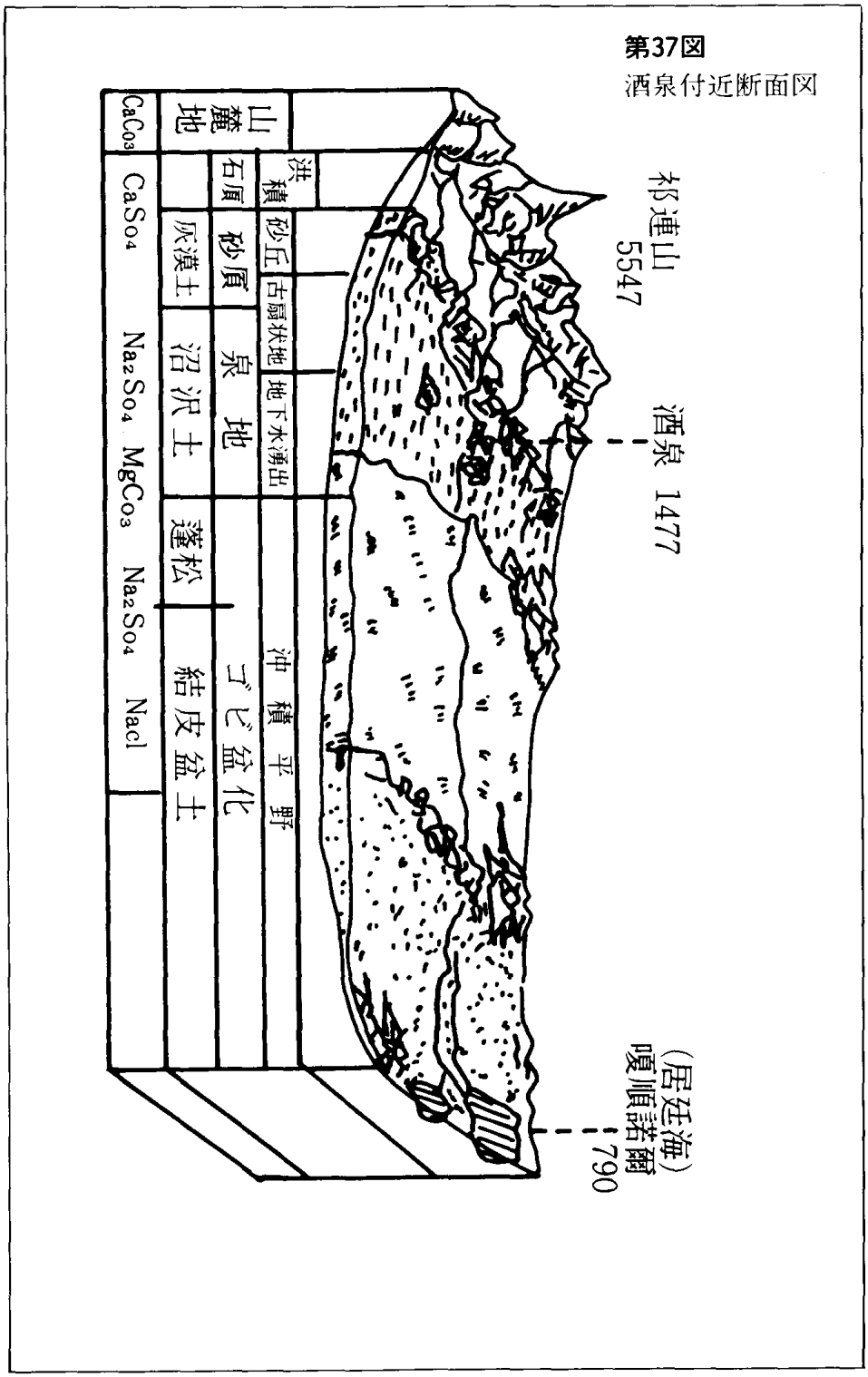
⑥「地理風俗記」などによると，前漢の霍去病が武帝から賞賜せられた酒を泉に注いで，部下の将兵とともに飲み，皇帝の恩徳を慕ったので酒泉の名があるとも伝えている。

陝西省にも酒泉があるが，ここの伝承によると，春秋時代周の邑荘公21年（BC 673）王が虢公と酒泉へ行くとしてあり，陝西省澄城県に甘泉があり，匱谷の中より湧出する。酒を造ると美味といわれ，このため酒泉と号したとある。各れにしても湧水，泉と関係があるものと思われている。今日の酒泉では城の東門外の地下泉があって湖心亭が設けられて公園となっている。泉眼は漢白玉で造られている。池の端に「西漢酒泉勝跡」の石碑が在る。地形的にみると酒泉の地は扇状地の扇端にあたり（第37図及び第38図参照）各れから湧水してもおかしくない位置にある。必ずしも酒泉と称す泉が一ケ所だけと限定することもないのかも知れない。

酒泉の年降水82mmあるが，蒸発量も７月で348.0mmであるので，祈連山系の雪融水や伏流水が豊富でないと砂漠化する地方でもある。積雪期間は11月下旬に始り３月下旬まで続く，最低気温は－28.6℃となり河西走廊の要地でなければ経済的行為が限定される地方でもある。

酒泉は高台の西北140kmの地にあって，漢の元狩２年（BC 121）に匈奴昆邪王の地へ郡を設けて，禄福県酒泉郡の治所を置いている。⑦張騫伝[23]によると「郡内に金泉有，味は酒の如し，今は地の西に初めて築き，酒泉郡を置き，西北の国へ通ずる」としている。東漢代には福禄と改名して晋代へ引き継いでいる。

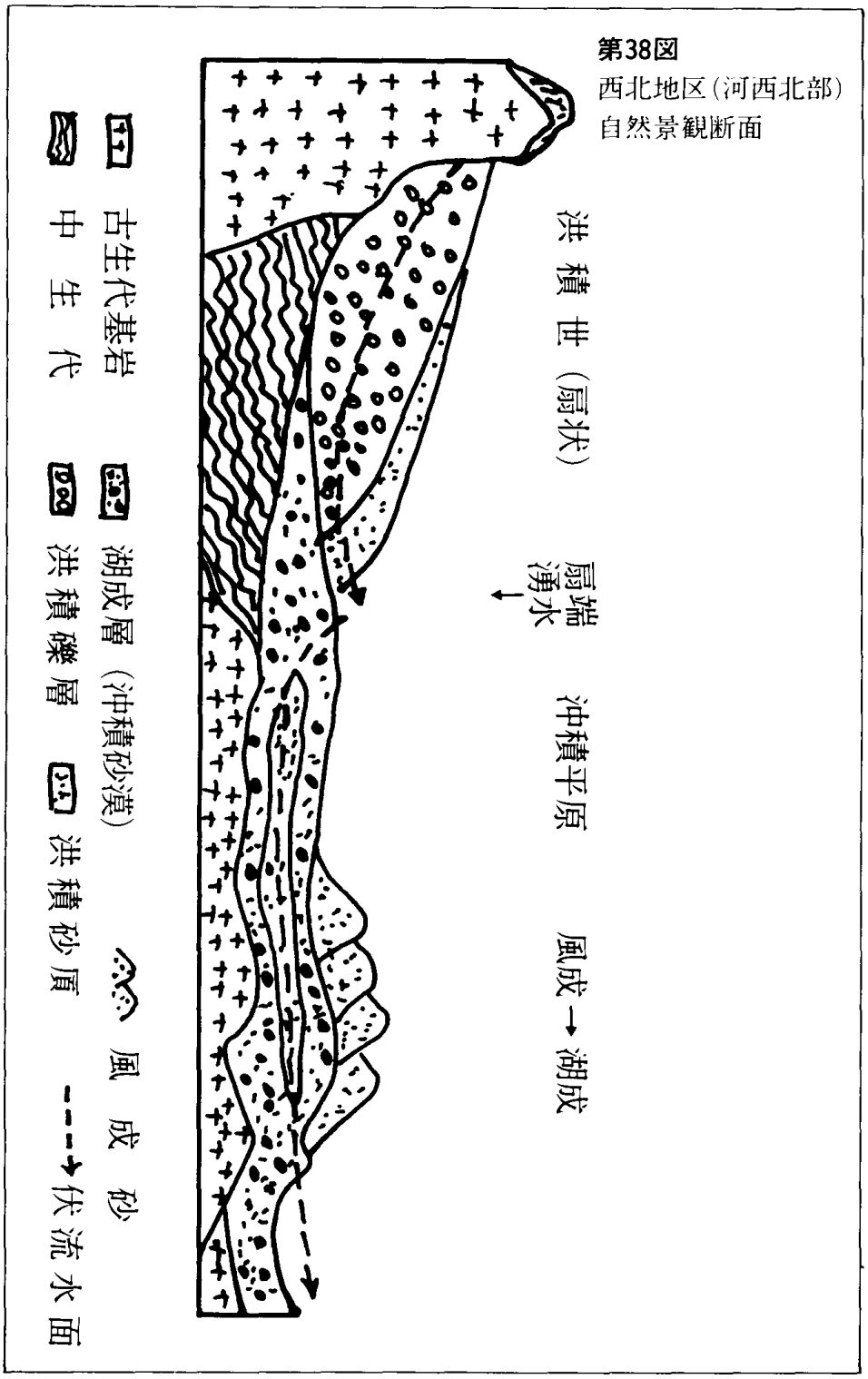
義熙年間のあと李嵩が酒泉を首都として，後涼（十六国の一）を建てるが，後に北涼に含まれて了っている。北魏は北涼を攻め酒泉軍を設置して，福禄県とし軍治所としている。やがて名称を酒泉郡から福禄軍とし更に福禄郡としている。隋代には酒泉郡を廃止して，酒泉県へ編入し張



第37図
酒泉付近断面図

掖郡の管轄としている。義寧年間に再び酒泉県を独立させている。

唐代に入ると粛州を設け隴右道粛州の治所となっている。「東方見聞録」には，早くから西域で粛州は知られたとあり，酒泉の城内には当時



第38図
西北地区（河西北部）
自然景観断面

二区に大別されていて，一方は漢人街，一方は回教徒街[24]であるとしている。西城文化との接点に立つ酒泉は，ある意味では租界地的構造をもっていたのである。

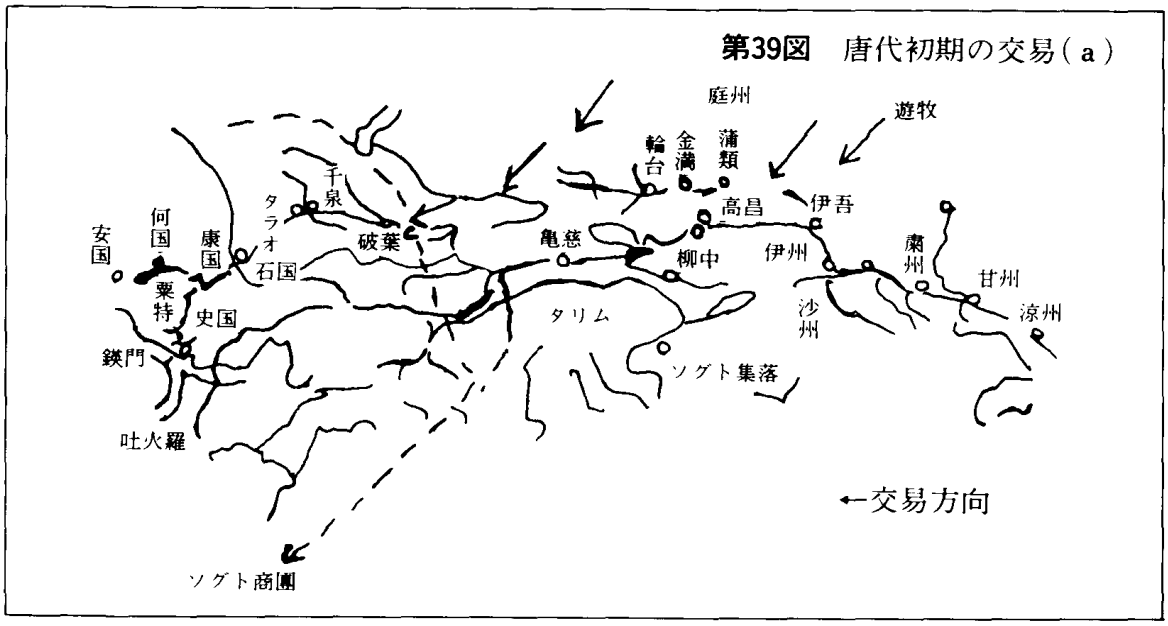
今日酒泉市街中央十字路には三層の鼓楼があり，東西南北へ向けて四つの門が開かれており，各々「東迎華獄」「西達伊吾」「南望祁連」「北通砂漠」とある。往時の酒泉の地理的な位置をよく示しているといってよい。

唐代以降吐蕃に没し，宋代は西夏の地となっている。元代に入って粛州路が設けられ，明代には粛州衛と変えられ，清代に入って甘州府となり，後に粛州を復活している。1913年に県と改称し，県名を酒泉と改めている。翌1914年には甘粛省安省道の治所となり，1958年に酒泉市が誕生している。1964年に酒泉県酒泉市の名称が用いられるようになって今日に至っている。

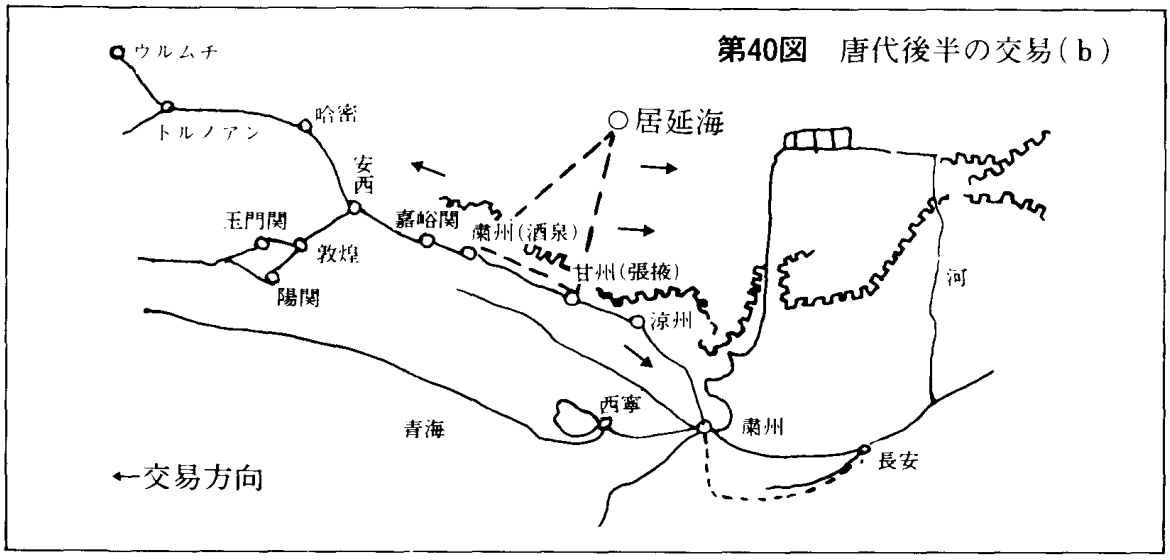
この地には漢墓や魏晋墓，五胡十六国代の墓などがあって，漢族は勿論，氐族，匈奴族，鮮卑族，五涼国などの交易を通しての雑居都市であったことが伺い知れる。同時に各族の最前線であったこともわかる。要道としての酒泉を示す各族の壁画なども発掘されつつある。併し，唐の詩人岑参の「酒泉の韓太守に贈る」にある如く「酒泉西望，玉関道，千山万蹟，皆白草，辞君草馬，帰長安，思君倏忽，令人老」という辺彊の地であることには変わりはない。酒泉の別名は「風庫」ともいわれ荒涼たる砂漠に隣接していて，風力が強いといわれる。

高台から黄兆舗に至る地域などは，まさに荒漠たる砂地である。臨水（臨水河）に楊柳が在る程度で，双橋灯，米家，二十里馬房，紅橋墩などに街道小集落などは当時を偲ばせるものがある。二十里以西酒泉までは黄砂塩が広がっている。口外（長城外の地）には古くから纒頭回の人々が居住し集落を形成していたといわれる。高台から徒歩四日，張家口から徒歩五十日，安西へ徒歩十一日が一般的行程であったといわれている。

酒泉を流れる北大河（Heidahe）は，臨水或白河とも称している。祁連山西部の抜来山系と抜来南山系の間に発し，金塔県[25]の鼎新で黒河へ注いでいたのである。平常は数条に分流し流水幅大きく，かつ急流をなし



第39図　唐代初期の交易（a）



第40図　唐代後半の交易（b）

ている。後に潅漑用水として利用され下流への延びが少くなっている。

居延海と酒泉と張掖を結ぶ三角状の中へは異族匈奴[26]を入れまいとする漢の政策が長い間繰返えし実施されている。時には一旦退却して涼州（武威）へ前進基地を移したり，張掖へ後退することもあったが，漢族は執拗に酒泉を奪回している。河西走廊の安西や敦煌の雑居地とは異なる都市性格を要求された都市でもある。（第39図参照）

酒泉地区は広大で，酒泉県をはじめとして金塔県，敦煌県，安西県[27]と嘉峪関市，玉門市，阿克塞哈薩克族[28]自治県，粛北蒙古族自治県[29]などの行

政区画に分かれている。既にここでは別な機会に扱った敦煌，安西，阿克塞哈薩克族自治県，粛北蒙古族自治県などの各県を除外して扱いたいものと思っている。なお，王翰の「凉州詞」にある「夜光杯」は酒泉で今日製造されている。

8

金塔県（Jinta）は弱水の上流域で北大河（白河，臨水）と黒河（黒水）が合流する黒河下流の集落である。酒泉県の東北55kmに位置し，明代に建立されたと伝えられている金塔寺城（県境に近い）が地名の語源であるといわれている。清代には，この付近は「王子荘」といわれていたと伝えられている。その清代には粛州に属していた。州同（州官）が常駐していたともいう。1913年高台県より分離して，翌1914年甘粛省安粛道に区分され，1956年に鼎新県に編入されていたが，後独立して金塔県になっている。

鼎新（Dingxin）は高台県の北125kmの地にある辺彊の集落である。清代には高台県へ編入させて県丞即ち副知事の輔佐を駐在させている。1913年にこの地を区分して毛目県を設置したが，1928年には鼎新県と改名して，後に金塔県に入れたものである。

金塔は古くから金塔緑州（泉池）という表現があって駱駝路として知られていた。最近になって烽火台より「張掖都尉警信」なる赤地の旗が出土しているが，これはもともと公文書を運搬する使者が持つ旗であったところから，張掖との深い行政の結び付きがあったものであると推測されている。

嘉峪関[30]（Jiayuguan）は明の洪武五年（1372）に馮勝が河西へ下り瓜沙（瓜州と沙州即ち安西と敦煌）をすてて後退し城塞を築き戍（関所）に置いたのが初めてといわれている。嘉峪山の西麓にあったので，嘉峪関と呼称されたと言われる。高地険悪な地であるが，東西交通の要衛地で関所としての適地であった。十九世紀の伊犂条約で商埠地となってい

る。併し，実際の取引は酒泉市で行なわれている。1958年付近で鉄鉱が発見され鉄工業がさかんとなって，工業都市へ変容しつつある。

嘉峪関とは谷の上に建てられた関所の意味がある。明代の建築で，甕城，内城，外城と物見櫓から成っている。物見櫓の雄大さは特に有名である。この地から25km程北にある陵墓から220～410年頃までの遺跡が発見されている。玉門関[31]のみでは関所を守り難いということで設置された城塞であるといわれている。

酒泉から嘉峪関までの走廊中にある集落は北大河，四清堡，丁家墩，安遠家，東積門，嘉峪関と続いていた。嘉峪関の北に牌楼山の丘陵があり馬鬃山（Mazong shan）は2584mで，山容が荒々しく馬のたて髪に似るところから命名されたと伝えられている。甘粛省の北山といわれ，かつ南の合黎山系と併せて走廊北山といわれることもある。馬鬃山系の平均高度は1800mである。

嘉峪関の北の玉門関[32]（玉門市）がある。漢代の玉門（BC 104～102）は大宛征伐以前で敦煌の北西100kmの地にある。それを故関と称している。更にもう一つ「古玉門」がある。新疆ウイグル自治区の土魯番県の哈喇和卓の西北30kmの地点である。民国代には一時「玉門口」と称していたこともある。

隋，唐の玉門は安西県の東方にあって，現在の玉門市（玉門関）と直接の関係はない。

玉門関[33]（市）は北魏に玉門郡を設置して，隋に玉門県として雍州敦煌郡に入れて，唐は隴右道粛州に属させている。西夏の故城は県城の東に在る。明代には赤金衛としている。清の初めには靖逆県を池頭県と分離して属させ，その後，今の玉門市を玉門県として独立させている。甘粛省安西州に属させていた。1914年に甘粛省安粛道の中へ区画して，1937年含油層が探査され，1941年に油田を発見し，1953年から油田開発がすすみ，1955年より玉門市制をとり，1958年に玉門県を廃止し，鴨児峡，

白楊溝，石油溝などで採油し，1963年より蘭州へ石油パイプ輸送開始（精製能力200万ｔ）している。

漢代に玉門関（故関）[34]より駐屯地を移したことから玉門と称したといわれ，北辺防衛と西域文物の流入口であったのが，今日では近代エネルギー資源の供給地と変わりつつある。

河西走廊における鉱産物は玉門市の石油をはじめとして，鏡鉄山，白銀の銅，永登の石膏，武威と皋蘭の硫黄と，黒水の名の源である阿干鎮，山丹，永昌などの石炭は良質として知られている。明代に設置されたと思われる玉門関の東南にある赤金峡からは砂金が産出している。

嘉峪関から走廊を北上すると，双井子，回々堡（東河堡），火焼溝，赤金峡（赤金堡），三十里子，東梁，玉門関となる。赤金峡はその西に塩を生産する草湖があって，その湖岸から赤金（砂金）が採取されたので，咸豊年間に命名されたと伝えられている。

玉門関からは鞏昌（鞏昌河），柳東号，柳西号，三道溝を経て疏勒河を渉り四道溝（四道溝河），六道溝（六道溝河），東溝屯（東溝河）に至り安西へ達している。三道溝を超えてから古い布隆苦城跡がある。今日の鉄道は走廊とほぼ平行して，その交通慣性が利用されている。玉門は少し西に玉門駅をもっている。

嘉峪関を北へ玉門駅，五華山（走廊では甘店子），低窩舗，玉門鋏，疏勒河，橋湾（橋溝）などがある。古来玉門に関する詩文が多い。唐代の王昌齢の詩の「青海長雲暗雪山，孤城遙望玉門関，黄沙百戦穿金甲，不破楼蘭終不還」が知られている。

なお，北大河は白河，臨水とも称すと述べたが，上源は洮賚河といい，俗称を討来河といっている。西北より出て折れて紅水や清水河と合流し夾山の北に至って白河といわれる。

北へ出て金塔県を過ぎ，金塔堡の西に天倉水と称し，毛目城の西で黒河へ合流している。

この地方の地名の特色は「砦」と関連して「堡」，「城」，関所と関連して「関」，地形と関連して「墩」，「灘」，「弯」，「湾」，「台」，「決」，集落と関連して「舗」，「屯」，「庄」，水と関連して「池」，「溝」，「井」，「水」，「泉」，「洞」，「河」，などの地名が多い。なお，「台」は秦代では「うてな」として用いられ郵便局とか役所の意味がある。宋代にも安撫都賢台というのが置かれている。又，「舗」は駅舗として用いられているので駅逓の意味にも用いられることがある。

注

① 高台県（Gaotai Xian）黒河中流．人口12.7万人，南部は祁連山，中部は河西走廊，北部は合黎山系，１月平均気温－10.4℃，７月平均気温22.3℃，年降水99mm，甘新公路通る。小麦，粟，青稞，とうもろこし，えんどう，馬鈴薯，稲，棉花，瓜類と牧畜，駱駝飼育

② 阿拉善右旗（Alxa Youai）内蒙古自治区　1961年設立　高原地形，砂漠，人口2.1万人，蒙古族と漢族　１月平均気温－10℃，７月平均気温23℃，年降水100mm，牧畜主産業，甘粛省の塩沢と山丹への道あり．城鎮額肯呼都格．

③ 額済納旗（Ejin Qi）内蒙石自治区　1950年自治旗設立，寧夏に属す．1956年内蒙古改め今日名，人口1.4万人，蒙古族，漢族，戈壁砂漠，１月平均気温－12℃ ７月平均気温24℃，年降水50mm，牧畜業主，阿拉善右旗と酒泉への道あり，城鎮達来湖布．

④ 戈壁（Gobi）戈壁灘或は戈壁砂漠ともいう．蒙古語の草木の成長しない土地から，成因によって風化の礫質戈壁．水成による礫質戈壁．風成による砂質戈壁と分ける。塔里木，準噶爾，柴達木の各盆地の山麓に石礫戈壁がある。

⑤ 巴彦淖爾盟（Bayannur Meng）寧夏回族自治区と甘粛省に接し，内蒙古自治区の西部にある。盟公署は臨河県，臨河，五原，磴口の３県と杭錦後旗，潮格旗など４旗を管轄している。1956年に盟を設定，1958年に河套行政区と古く烏蘭察布盟に属していた烏拉特前旗と烏拉特中後連合旗を編入している。清代に蒙古族の行政単位を「旗」で区分した。本土の県級である。古くは蒙古帝国代の軍制単位である。清朝は蒙古族の居住区を200にのぼる「旗」で区分し，「旗」を越えることを厳禁している。「旗」には「旗長」がいて蒙古族は兵丁となった。「旗」をいくつか集めて「盟」を設けた。蒙古の古俗である諸候会盟である。「盟」には「盟長」がいて，春に「旗長」集めて勅書を伝えている。解放後行政の改革を行い呼倫貝爾盟を黒竜江省へ，哲里木盟を吉林省へ，昭烏達盟を遼寧省へ，巴彦淖爾盟と阿拉善旗を寧夏回族自治区へ，額済納旗を甘粛省へそれぞれ併入させている。阿拉善旗

は銀川と，額済納旗は酒泉と経済，文化の交流があったことから編入されたものである。今日「旗」は内蒙古自治区のみで，「旗」と「自治旗」がある。区轄下にあるもの２つと，盟の行政指導下にあるもの51がある。「自治旗」は「旗」の内で自治が認められたものである。呼倫貝爾盟に鄂倫春，鄂溫克族，莫力達互達斡爾族の３自旗のみである。

⑥ 「旗」は蒙古族の居住区で用いられている行政の単位であるが，別に史的には清の太祖が軍団の基礎単位として使用したものもある。300人の男子から成る軍団を牛彖といい，牛彖長を佐領と称し，５つの牛彖で１甲喇といい，長を参領と称し，５つの甲喇で１固山といい，長を都統と称している。１固山7500名の組織で編成されていた。この軍団は黄，紅，白，藍の旗をもち，更に同色の縁どりした旗の８種類の軍団があったため，満州八旗と称していた。北京へ入城してから禁旅八旗といい，他の旗は蘭州とか伊梨，内蒙古に駐屯して駐防八旗といわれる。八旗は各地で漢化したため区分がなくなったが，これは軍団の八旗で，内蒙古自治区の「旗」とは異なるものである。

⑦ 磴口県（Dengkou Xian）1929年県設置，1959年巴彦高勒市，1964年再び磴口県，県政府巴彦高勒，人口9.5万人，「河套蜜瓜」を産する。１月平均気温－12℃，７月平均気温24℃，年降水150mm。

⑧ 杭錦旗（Hangginqi）は伊克昭盟の北西部で包頭市の西南，清の順治年間旗となる。庫布其砂漠の南部，人口12.6万，１月平均気温－12℃，７月平均気温23℃，年降水300mm，旗政府は錫尼，ここでは磴口の北の杭錦後旗（Hanggin Houqi）を含めて考えている。巴彦淖爾盟の西，黄河と狼山の間にある。1942年米倉県，1953年に現名，1958年狼山県と陝坝鎮を編入している。旗欧府は陝坝，１月平均気温－12℃，７月平均気温23℃，年降水150mm，人口25.5万人である。小河川発達し，西部が砂漠である。

⑨ 張掖市（Zhangye Shi）人口38.2万人，漢族の他回族，蒙古族，裕固族居住，南部走廊，北部竜首山，黒河に臨む。１月平均気温－10.6℃，７月平均気温21.5℃ 年降水116mm．甘新公路 小麦，粟，とうもろこし，稲，棉花，大麻，甜菜，枸杞 電力と機械工業

⑩ 唐に出て来る漢の武帝はBC 156～87の人，前漢の７代目の皇帝，西域，南海，朝鮮に版図を拡大している。張騫を西域へ送り大月氏の盟約結ぼうとし，衛青，霍去病をつかわして匈奴を追いシルクロードを確保した。李広利には大宛をせめさせている。漢の西域時代つくる。のち農民反乱などあって衰退している。

⑪ 張家口は古く嗄爾干（Gargan）でカルガン（Kalgan）と称していた。時には嗄爾根，洛加爾とも書いている。この地に卡倫（カロン）がおかれたのでこう呼ばれたという。満州語で防守の地，蒙古語で哈噶爾卡（ハガルカ）といって関所の意味があった。明代に張家口堡を築いている。下堡と上堡を作って蒙古と

通商している。一時張北へ治所を移すが後に再び戻している。キャフタへ通ずる要所にある商都である。

⑫ この地方の小集落に「堡（bao）」の付くものが多い。もともとは砦のことである。この地方では小さな城壁のある村を指していると思ってよい，ただし「堡（bu）」と発音する。地名用語で「舗（pu）」と同じ意味であれば「堡（pu）」ともいっている。

⑬ 墩（dun）は盛土した小山のことをいうので，地名でいうと里塚ということになる。走廊の場合、堤防にも用いている。

⑭ 舗はもともと広げて置くことを指して商店に用いられていた。地名用語で使われる時には Pu（堡）と同じで宿場を意味している。

⑮ 庄（zhuang）は荘で，一般には村や集落ということが多い。

⑯ この地方の集落名に「壩」の付く地名がある。西南で用いられる「壩子」とは違って，ここでは堰堤の意味である。堤防で囲んだ土地を指すことが多い。

⑰ 弯（Wan） 曲折している処を指す．弯路（Wanlu） は曲がった道のことである

⑱ 湾（Wan） 川の流れの曲がっている処をいう．

⑲ 灘（tan）砂浜や中州転じて砂漠．「灘羊（tanyang）」とは寧夏，甘粛の黄河両崖で産する羊をいう．

⑳ 斐矩は557～627年の人，隋唐の官史で605～610年の間4回河西へ派遣されて西域貿易の促進事業を行った。吐谷渾の征伐や伊吾の経営もしている唐に服して民部尚書になった西域図記は全3巻である。

㉑ 臨沢県（Linze Xian）黒河中流中洲，南端青海省に接す 清代撫彝庁，1913年撫彝県，1928年臨沢県，人口11.6万人．1月平均気温－9.6℃， 7月平均気温22.2℃，年降水114mm， 小麦，粟，とうもろこし，馬鈴薯，高粱，稲，胡麻，棉花，大麻，桃，梨，杏甘新公路

㉒ 酒泉市（Jiuquan Shi）祁連山北麓扇状地 東は戈壁，西は草原，人口26.7万人，漢族の他裕固族，回族，1月平均気温－10.3℃ 7月平均気温21.4℃，年降水82mm，小麦，とうもろこし，粟，青稞 製紙と肥料工業

㉓ シルクロードの東半分の旅行者，BC 139漢の武帝の命で月氏への使者となる。途中匈奴に捕えられる。10年間過ごして西アジアへ逃がれて大宛，唐居，大月氏，大夏を廻遊して南道経由で帰国途中再び匈奴に捕えられたが，匈奴の内乱で単于の子於単と漢へ帰る。後に蜀からインドへ入ったBC 115帰国翌年死す。

㉔ 回教徒の主力は地中海から紅海へ，更にインド洋から中国の南海へ入ったものであるが，7世紀の半ばには長安にさえ信者がいたといわれる。河西走廊に住みつくようになったのは，13世紀の元代で，蒙古帝国が西アジアへ侵入すると同時に商人や回教徒が入ったものである。人種からみるとトルコ系，イラン系，アラブ系と多様であるが，その後殆んど漢化してしまっている。

㉕ 金塔県 (Jinta Xian) 黒河下流　1913年高台より分割，人口11.0万人，北部低山，中南部扇状地と草原，1月平均気温－10.5℃　7月平均気温23.8℃，年降水55mm 小麦，とうもろこし，粟，馬鈴薯，高粱，胡麻，棉花，石炭，銅，鉄，鉛産出，酒泉と額済納旗への公路ある。

㉖ 匈奴は前4～5世紀にかけて蒙古高原にいた遊牧民，前3世紀末には頭曼，冒頓単于が統一国家形成，月氏を追って西域を支配河西へ侵入する。漢と抗争す。1世紀末内紛をおこし一部は南下して南匈奴となる。4世紀に五胡の一つで前趙や北涼国を建てている。

㉗ 安西県 (Anxi Xian) 新彊ウイグル自治区と接す　漢代冥安県，清代安西州，1913年安西県，人口7.3万人，漢族の他回族，祁連山と北山の間の草原，疏勒河に瘠む，1月平均気温－10.2℃，7月平均気温24.5℃，年降水35mm，小麦，粟，胡麻，安西瓜，安西牛.

㉘ 阿克塞哈薩克族自治県 (Aksay Kazakzu Zizhixian) 青海，新彊に接す．祁連山地，氷河地形，党河南山，野馬南山に瘠む，1月平均気温－12.0℃，7月平均気温18.0℃，年降水100mm，牧畜主，羊，駱駝，牛，小麦，大麦，青稞，馬鈴薯，胡麻，野生の駱駝，牛，馬，人口0.7万人，哈薩克族　城鎮博羅転井

㉙ 粛北蒙古族自治県 (Subei Mongolqu Ziqhixian) 青海に接す．1950年自治区，1954年現名，1955年自治県，漢族と蒙古，回族，人口11.0万人，党河，疏勒河に瘠む．1月平均気温－12.0℃，7月平均気温26.3℃，年降水76mm，牧畜主，蒙古羊，駱駝，牛，城鎮党城湾

㉚ 嘉峪関市 (Jiayuguan Shi) 北大河北岸　1965年市設立，人口8.1万人，酒泉草原の西端，1月平均気温－15℃，7月平均気温29.0℃，年降水80mm，蘭新鉄道，甘新，鏡鉄路，甜菜

㉛ 玉門の「玉」はJadeで崑崙山麓から採れる軟玉で于闐が主産地で古くから中国では装飾用に珍重され「玉座」などの言葉となる。特にヒスイを指すこともある。「玉帛 (yubo)」というのは国と国の交易の際に贈り物として玉器と絹織物を用いた。シルクロードはこの二物によって開かれたといってもよい。

㉜ 玉門関は漢代甘粛省の西におかれた関所の名称である。敦煌から西域に出ていく関門であった。玉門関の設置は前2世紀末。以降南北朝には敦煌の北西100キロの地から移して安西の東方へ後退させている。唐代には再び敦煌の東200kmの地点へ玉門関へ移動させている。吐蕃の侵入によって玉門を移したといわれる。しかし不明なことが多い。

㉝ 玉門市 (Yumen Shi) 疏勒河下流，人口18.5万人，祁連山系と北山の中間の草原1月平均気温－10.6℃，7月平均気温21.5℃，年降水56mm，小麦，とうもろこし豆類，胡麻，棉花，甜菜，大麻，瓜類，牧畜，石油，石炭，金，銅，硫黄など産出

㉞ 関城は方形で，西と北に両門があり，北は琉勒河に臨み西域の玉石を入れた古名の玉門は本文にある敦煌の北西100km，ここから玉門北道と陽関南道に分かれていた。西安と哈密を結んでいる。その後六朝に至って関所が東へ移り，安西の双塔堡付近となる。宋以後，陸路交通絶えて廃止されている。王昌齢の「従軍行」の「青海長雲暗雪山，孤城遙望玉門関」や王之煥の「涼州詞」「羌笛何須怨楊柳，春風不度玉門関」は各れも，この地のことである。